

石川忠雄先生追悼座談会

国分 本日、先生方には、「石川忠雄先生を偲んで『法学研究』に特別の企画として「追悼座談会」を掲載したいという趣旨でお集まりいただきました。

今日は石川先生にとくにゆかりの深かった先生方における越しいただきまして、先生がとくに法学部の研究と、教育にどのような形で貢献されたのか——それは法学部だけではなくて、広く慶應義塾全体ということになるかと思えますけれども——ということについての話を中心に行いまして、追悼に加えて、さらに今後の法学部への期待なども最後には少しお伺いできればと思っております。

私が大学に入ったのは一九七二（昭和四七）年でして、

名誉教授 小田 英郎
名誉教授 山田 辰雄
法学部教授 小此木 政夫
法学部教授 国分 良成
(司会)

石川忠雄研究会に入ったのがその翌年の一九七三年です。石川先生はすでにそのとき法学部長になられていて、今の私より若かったのです。そして一九七七年に塾長に就任されました。私が大学院の修士二年のときでした。つまり、私自身は学生としては法学部のなかで石川先生の薫陶を受けたのですけれども、法学部の教員としてはその場におりませんでした。そういう意味で、私は石川先生が法学部のなかで研究と教育をどのようにされていたのかを、先生方からむしろ色々とお聞きしたいといううな関心から、今日は司会をさせていただきます。

まずはじめに、三人の先生方から簡単に、石川先生と

どという形でつながりを持たれていたのかについてご紹介させていただいて、それとの関連で少し石川先生の思い出を語っていただければと思います。まず、小田英郎先生からお願いいたします。

先生との思い出

小田 それではご指名ですから、トップバッターということでお話しいたします。私と石川先生との出会いは大学三年になったとき、昭和三〇年四月、ちょうど石川先生が教授になられたときです。私は石川ゼミではないのですけれど、昔は一年から四年までずっと同じクラスで過ごすという制度になっていました、それで石川先生がわれわれのクラスの英書講読の担当者だったんですね。当時は英書講読とは言いませんで、「研究指導Ⅱ」と言っていました。それで一年間英書を先生に教えていただくということ、テキストのタイトルも覚えていますが、*Soviet Policy in the Far East* というマックス・ペロフの書いた本で、毎回五ページずつは必ず進む。石川先生が巧妙なのは、私に「君には必ず毎回当てるからね」(笑)と。そうしないと途中でみんなもうやって来なくなるの



けど(笑)、そういう出会いがありました。

ただ、石川先生は翌年ハーバードに留学をなさることになって、昭和三二年度、四年の年は別の先生に替わってしまわれたので、たった一年しか学部時代にお世話になりませんでした。けれどもその後大学院へ進学して修士課程で石川先生に指導していただくことになりました。たぶん大学院で石川先生に正式にいたしたのは私が最初だと思っています。徳田教之(故人・筑波大学名誉教授)さんは先輩で実質的には石川先生の最初のお弟子さんですが、当時の大学院の制度では、先生はまだ指導資格がなかったのです。確か英修道先生が徳田さんの指導教授だったと思います。

小此木 徳田先生とどのくらい違うのですか。

小田 徳田さんとは二年違いです。

で、人のプライドをくすぐりながら、「必ずやるからね」と言って五ページずつ稼ぐのです。実に巧妙ですね。私はその手は使いませんでした。



小此木 徳田先生は確かゼミの一期生だという話ですよね。

小田 そうです。だから徳田さんは石川先生が教授になる前の、助教授の最後の二年間、石川ゼミで過ごしたのではないですか。徳田さんと私はそういう出会いで、大変お世話になりました。

国分 山田先生いかがですか。

山田 以前別のところに書いたことがあります。私は最初法律学科に入りました。一年生のときにちょうど石川先生の『中国共産党史研究』が出版され、その頃から中国に興味を持っていましたので、二年から政治学科に転科して、三年から石川ゼミに入りました。あとはずっと石川先生に学問的にも個人的にも指導を受けました。ご存じのように先生は、常任理事や学部長になられたのが比較的早かったので、

私は助手や講師時代に石川ゼミの師範代みたいなことを結構長くやり、助教授になったときに独立して自分のゼミを持ちま

した。先生は常任理事として忙しかったために、私は先生の中国政治史の授業を専任講師時代に代講したことがあります。石川先生の指導によって後に中国研究から東研究に変わりましたが、富田広士君がその時の最初の学生でした。

小此木 私は研究会ではじめてお会いしたわけですが、私に発点から色々な偶然の要素があつて、あとになつてみると、あれがこうなつていたらどうなつていたのだろうかというようなことを、考えざるを得ません。ちょうど先生がたぶん常任理事になられた年だと思つています。石川ゼミに入るためにはサブノートを何冊も書かなければいけないということで、早めにそういったものに着手していたら、「今年はゼミ生を採りません」という掲示が出たのです（笑）。理事になられてよほどお忙しかつたのでしようね。私は非常に残念であつたけども諦めざるを得ないかと思つたのですが、同期の仲間のかにそういう意味では非常に積極的な男がいて、先生に談判に行つて「署名運動をやる」と脅かしたのです（笑）。それで先生がゼミをやってくれたので、ゼミ員になることができたのです。しかし、そのときから理事室でゼミ



をやられたり、あるいは、自宅に呼んでいただいたりという、そういう状態でした。

小田 変則的な授業だったわけですね。

小此木 ええ、変則的だったですね。それは大学院に入ってから同様だったのですけれども。

国分 私の場合は大学一年のときに、山田先生の講義を履修していたのですけども、そのときにゲストで石川先生が来られたのです。

山田 ああ、そういうことがあったかもしれないね。

国分 ええ、何回かゲストで来られた。それでその講義に感動して。いや山田先生に感動しなかったわけではなくて(笑)。

山田 そんなこと気を遣わなくていいよ(笑)。

国分 残念ながら山田ゼミに入らなかつたのですが、石川先生のゼミにこれで入ろうと決意したので。石川ゼミは条件が厳しかったので必死にやりました、今は三年から四年ですけれど、あのときはゼミは二年から三年



だったのですね。二年間石川先生のゼミで勉強し、そしてそのあと大学院に入れていただいた。ただ、その直後に私の修士二年のときですけれど、石川

先生が塾長になられましたので、実質的にはそのあと山田先生のところに里子に預けられ、あと小田先生や今年亡くなられた太田俊太郎先生などの地域研究の先生方にお世話になり、その後大学に残らせていただいたという経緯があるわけです。

小此木 ちょっとその辺で補足的に入れておいたらいいのではないかと思つて、あえて口を挟むのですけれども……。先ほど話に出た徳田先生のほかに、平松茂雄さん、小島朋之先生がおられました。平松さんは先輩で私も指導を受けました。小島さんは昨年お亡くなりになって今日この席にはいらつしやいませですが、ちょうど小島さんあたりが山田さんと私の中間ぐらいですね。だから石川ゼミ全体で見ても真ん中あたりではないかという気がします。

山田 平松さんは先輩ですが大学院時代一緒でした。

大学院時代石川先生の下で中ソ論争について大変すぐれた論文を書かれ、当時としては異例でしたが『法学研究』に掲載されました。平松さんが中国の軍事問題に本格的に取り組まれたのは、一九六九年から二年間香港総領事館に特別研究員として滞在され、さらに防衛研修所で仕事をされるようになったからだと思います。それから、小島君と石川先生の関係を言っておくと、もうそのときは石川先生は理事をやっておられました。それで小島君が石川先生のところへ行つて中国の勉強をしたいと言つたのです。私は大学院の学生で、石川先生が私に「面白い学生が来たから、君、面倒みてやれ」と言われて。

小此木 そのときもうすでに理事をやられていたんですか。

山田 そうだと思います。

小此木 先ほどの話に戻ると、きっと理事を何年かやられて、同時に教えられていて大変なのでゼミをやめようと言ったんですね。

山田 それは学生運動とも関係していたのかもしれない。先生の学者としての生活が相当被害を受けられたこ

とがありました。

国分 小島朋之さんは、私が学部のとときの大学院生の長老格で、私などはそれでびしびし指導されたという、そういう関係です。あこがれの存在でしたね。

さて、これで石川先生と私たちとのつながりが歴史に沿って明らかになりました。次に研究活動面での貢献に關してですが、それはもちろん中国共産党史研究ですが、これはまさに日本の現代中国研究に一つの新しい風を吹き込んだ内容だったというふうに思います。

同時に慶應義塾の法学部において、とくに地域研究の発展に尽力されたと記憶しております。石川先生がアメリカに留学された当時、アメリカで地域研究が非常に盛んだったわけですけど、この手法を昭和三二年か三年に政治学科に、地域圏研究という形で導入された。その後地域研究センターというのが慶應義塾の一二五周年を記念して設立されましたけど、そのときも初代所長が小田先生でした。そのあたりの石川先生の地域研究への貢献を、少しお話しいただけますか。

地域研究への貢献

小田 私はさきほど申し上げたように石川ゼミの出身でなくて、国際政治の内山正熊先生のゼミの出身ですが、石川先生のご指導をいただいて地域研究にしたいに関心が向いていきました。ところが大学院に入るときに、地域研究の教授がほかにいないのですよ。それで石川先生を選んだわけではないけど、たぶん先生もそういうことはよくご承知だったので、私を弟子に採ってくださいだったので。最初は中国の旧新疆省ですね、いまの新疆ウイグル自治区の一九三〇年代のことなどをやっていたのです。石川先生は、自分はまだ単に中国研究者としての慶應義塾でいろいろ貢献するだけではなくて、慶應義塾のなかで地域研究というのをどんどん広げていきたいと思われた。これは慶應義塾の一つの特色になりうるだろうし、しなければならぬだろうというふうにはたぶんお考えになっていたと思うのです。

いま国分さんのお話にも出てきましたけど、先生は昭和三十一年から三十二年にかけてハーバード・イエンチン・インスティテュートに留学しますよね。で、結局一年終わってもう二カ月ぐらい滞在を延ばして、帰ってこれ

たようです。ですから私の記憶が間違いないければ、その経験をもとにして、さっきお話に出た地域圏研究というものも複数、法学部政治学科のいわば基幹科目として置いていこうと思うようになった。そしてそれを具体的な形にまとめ上げたのは多分三三年だろうと思えますけれど。そこでその後、長年続いた政治学科のカリキュラムの原型、とくに地域研究の原型ができた。

先生は中国だけではなくて、そのほかの地域の研究も慶應義塾のなかにぜひ発展させたいという思いがありました。すでに昭和三三年度には当時のソ連研究は中沢先生のものでありましたね。それから、賀川先生のラテンアメリカ研究もあつたわけですね。遠峰先生の、あの頃は中東と言わないで中近東と言っていましたけれど、それもあつた。それ以外に石川先生の手で最初に中国以外の地域研究を先生の弟子に担当させるという形で置いたのが私、つまりアフリカ研究だったろうと思うのです。その前に松本三郎さんの東南アジアがありますけれど、松本さんは英先生のお弟子さんなので、石川先生系統では私のアフリカというのが最初かもしれません。そこまで視野を広げられて、ずっとその先のことも考えて、そのあ

とも小此木さんの朝鮮研究も出るし、非常に早くから慶應義塾のなかでのそういう遠大な地域研究発展のプランをつくっておられた。非常に先を見る目があったという感じがします。

もう一つ、ついでですが、私がアフリカ研究をやらせてもらって非常にラッキーだったのは、あんまり人に教わるのが好きではないので（笑）、先生がいて、兄弟子がいってというのは窮屈なのです。そう言っでは失礼ですが、博士課程時代に指導教授になってくださった伊藤政寛先生だって石川先生だってアフリカのことは何もご存じないわけですから、「もう好きにやれ」と言われて好きにやって、傍から見て成功していると見られるかどうかわかりませんが、私自身はよかったですと思っています。先生に今でもその点では感謝しています。

小此木 ベンジャミン・シュウォルトの『中国共産党史―中国共産主義と毛沢東の抬頭』の訳ですが、小田先生も一緒にやっていますね。やはり石川先生がハーバードへ留学されたことなどの影響はあるのでしょうか。

小田 私は、あれは先生が偉いと思う。昔の話ですけど、大体弟子が翻訳をやって、先生も名前を連ねると

というのが、よくあるパターンだったのです。ところがあれは石川先生は全部訳したのを持っていました。

小此木 そうだったんですか。私は知りませんでした。

小田 ところが、私が可愛かったのか、あるいは翻訳にやや自信がなかったのか、それはどちらか知りませんが（笑）、「小田君、これをチェックしながら訳してみてください」と。

国分 そうだったんですか、それは私も知らなかった。

山田 先生は必ず、翻訳すると読み合わせをやられます。その読み合わせを、根岸毅君と私が手伝いました。

小田 普通だったら、仮訳とはいえ自分が全部訳していたら、最後まで自分でやるでしょう。あとは、訳者の名前も自分の名前だけでいいはずですね。それをまるで、私のほうが指導教授みたいなもので（笑）。

国分 そうですね、確かに小田先生が全部やったように見えますね。

小此木 そうそう、僕もそう思っていた（笑）。

小田 自分のために言っていると、直すべきところは直してまずけれどね（笑）、それは私も共訳者としてちゃんと役割を果たしていますが、それでも石川先生はほんとう

に偉いなど思つて。

小此木 アメリカの中国研究を取り入れるということに、相当熱心だったということですかね。

小田 そうでしようね。

小此木 あの当時そういう方はほかにはいなかったですよ。

小田 これは山田さんの言うべきことかもしれないけれど、われわれが大学院生の頃によく聞かされていたのは、戦前、戦中の日本の中国研究というのは、要するに当時の「中国通」の人たちがやっているもので、たとえば横文字はほとんど使わず、中国語だけ使った研究だった。欧米諸国の中国研究がまだ盛んでなかったからかもしれない。しかし第二次大戦後は逆で、日本も含めて西側の研究者は中国へ入れず、他方でアメリカの中国研究が西側世界の中国研究全体を研究方法も含めてリードするようになっていった。当時石川先生も中国へ行つたことがないけども、アメリカの中国研究のいいところを取り入れながら、場合によっては香港から遠く大陸を覗いて、現地感覚に近いものをつかみながら、中国研究を發展させていくというやり方にならざるを得なかった。

戦後の中国研究者と戦前の中国研究者との間に、非常に大きなギャップがあるというわけですよ。

山田 小田さんがいま、法学部の地域研究の發展を概観してくださったので、私は小田さんの話を受け継ぐ形で、石川先生の中国研究について気がついた点を申し上げます。ご存じのように先生の『中国共産党史研究』は、中国共産党を中心しながら、コミンテルンとかソ連との対立、対抗関係を軸にして書かれたのです。一九五〇年代の日本における中国研究のなかでは、やはり中ソ一体論が強かった。そういうなかであえてそのような視点を持つことに重要な意味がありました。先生は別に政治的にやられたわけではなく、学問的にやられたのですが、それは一つ重要な、優れていた点だと思います。そのこととおそらく、先生のアメリカの中国研究に対する評価とも関わっていて、小田さんが訳されたシウオルツの本はその一つだと思います。

先生は、アメリカの中国研究の成果を積極的に評価されようとしていました。それ自体大変なことでした。當時多くの日本の中国研究者は、アメリカ帝国主義者の研究という目で見ていましたので、それを学問的に正当に

評価しようというのは、先生の一つの優れた見方だと思います。そして共産主義を扱うなかで、先生は中国共産党の根底にあるナショナリズムの要素を非常に強く意識されていたと思います。マルクス・レーニン主義の受け入れ方自体が、中国のナショナリズムと結びついていたという見方です。この考え方は、単にそれだけの問題ではなくて、先生が中国・中国共産党を見る場合にその根底にあったと思います。

そういう意味で、先生はまずアメリカへ行つて勉強することをすすめられました。多くの地域研究者は、私も含めて結構アメリカへ留学しています。これは二つ理由がありました。一つは、当時なかなか中国へ行けないから、アメリカへ行つて中国研究を見てこいということでした。もう一つの理由は、アメリカの社会科学の方法を学んできなさいということでした。これは余談ですが、留学の前に先生から、まず英語がうまくなってくればそれでいい、どうせ行けば勉強するのだから、あんまりガツガツやることはないといわれました。先生はあまりガツガツやることでノイローゼになってしまうことを心配されていたと思うのです。しかし、あまり勉強しなくて

いいとは言われませんでしたけれど（笑）。まあ英語がうまくなればいいんだから、などと言って送り出してもらったという記憶があります。

国分 私の場合は八〇年代はじめだったものですから、どちらに留学しようかと迷いました。中国留学というのはまだ非常に限定的でしたけれどももう始まっていた。しかし、やはり先生は私に対しても、まずアメリカへ行つたほうがいいということを、強く勧められました。方法論をきちんとやって、英語もやってきなさい、それが将来につながるということを言われてました。今考えてみると、私にとつては、非常にそれが大きくその後につながっていますね。

山田 結果的には、慶應の中国研究は、もつと広くいつて慶應の地域研究は、まず西の社会を見たいうえで、広い視野をもって自分の地域を、東の社会を見ようというのがあって、この伝統は今でも続いていると思います。

小此木 当時の共産圏研究というのは、何か研究者が対象と一体化しているようなところがありましたね。政治的な運動をやっている人たちが研究をやっているようなところ、そういう重なりがあったように思うのです。

ですから、私が先生から学んだ一番大きなものというのは、対象に踏み込みながらも、常に距離を保っていないければいけないという、そういう姿勢ですね。これは大変重要なことだったと思うのです。

実のところ、最初に私は北朝鮮研究から始めましたから、石川先生が中国研究をなさっている手法というのを模倣しながら、対象をずらすような形で行ったわけです。当時の研究者はそう多かつたわけではないですけど、みんなマルクスやレーニンや毛沢東の言うことが正しいと思つたのと同じように、金日成の言うことを正しいと思つている人が多かつた。だから踏み込みながらも、しかし距離を置いているという研究方法というのは、ちょっと変わったタイプの人がやり始めたということ、当時あまり歓迎はされなかつたのです。しかしその後、徐々にそれが主流になつていったということではないかと思うのですけれど。

小田 なるほどね。私も少しつけ加えると、アフリカ研究を自由にやらせてもらえたので、非常に嬉しかったということ先ほど言いましたが、自由にといつてもやっぱり影響は受けているわけです。地域研究の手法とい

うのか、どういう分析のメスをどのように使うかというのは、石川先生の研究、『中国共産党史研究』のなかに収められたあのような研究から最初はほとんど学んでいます。だから石川先生の道具のなから色々なメスを借りてきて分析をしていくと、やがてそれは自分のメスをきちんとつくって持てるようになる、というようなことはありましたね。

国際政治への眼

国分 私も世代的にはもう少しあとになるのでですけど、石川先生の研究から学びとつた分析手法の一つは、中国を見る視点として、権力分析というのが中心にあります。慶應義塾のその後の中国研究もある意味では、どのような研究をやるうが、やはり権力に関する分析というものから離れないという感じがします。それと同時に、先ほど山田先生が言われたようなナシヨナリズム、そして同時にその背後にある中国人の行動様式などといったことをかなり強調されたという記憶があります。

もう一つ、私の世代になつてくると、日中国交正常化が一九七二年にありましたので、その頃から国際政治、

あるいは日中関係に対する具体的な政策も含めた研究のなかに、先生がかなり積極的に入られました。ですからこの頃の日中関係の研究と、それから具体的な政策提言などが有機的に関連していった、ちょうどその時期ではないでしょうか。ですから学問研究というものをふまえて、世界的に活躍されていく過程を目の前で拝見したような、そういう感じがしました。

小此木 石川先生の慶應義塾における業績が、地域研究にあることは間違いないのですが、いま国分さんが言われたあたりから、先生はやはり国際政治というものに関心を持つようになったのですね。それで大阪市立大学から神谷不二先生を招聘したわけです。それまでも内山正熊先生が西洋外交史の視点から国際政治を論じていましたし、それは田中俊郎さんに引き継がれています。私は神谷先生の助手にトレードされて、地域研究と国際政治の二足の草鞋を履くような形になりました。ですから私の朝鮮戦争の研究などはほとんどアメリカ研究みたいなことだったのです。

そのあと、松本三郎、池井優先生の門下生に葉師寺泰蔵さんが加わって、六、七人の国際政治グループという

ものが今は形成されているけれども、出発点の一つはやはり石川先生なのです。だからそれが非常に大きな業績だったのではないかと、思うに思っています。

小田 確かに地域研究を超えて、というところがあるかもしれない。『私のみた日本外交』という本もありますね。

研究者を育てる

国分 研究と同時に教育の側面もあろうかと思えます。先ほど言われたような地域研究の講座の設置とか、もちろん現代中国を中心とした講義、さらに石川ゼミ、こういう面で何か思い出に残るようなことはありますでしょうか、小田先生いかがですか。

小田 私たちの年代のことですけれど、私は、石川先生は非常にモチベーションを高めさせるのが上手だと思う。

山田 その通りですね。

小田 私は、昭和三四年に大学院に入ったのです。その年に先ほど言った徳田さんも銀行をやめて戻ってきた。それから私と一緒に池井優君だとか、あるいは内山秀夫

君だとか、そういった人たちも同じ学年にいたのです。そうしたら先生が「翻訳やろうや」と言って、有名な *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* の、一九五九年、つまり昭和三四年一月号の「中国特集」を取り上げたんです。Contemporary China and the Chinese というタイトルで、一四本の論文がそのなかに収録されて、ハワード・L・ポアーマンという有名な中国研究者が編者でした。それを、日本外政学会というところから先生が頼まれたからでしたが、みんなで訳そうやと言って、翻訳をやりました。一四本の論文ですから、一人が三つぐらい論文を受け持って、それが出たのが同じ昭和三四年の二月なんです。大学院の修士一年のときに自分の名前がきちんと著者の横に並んで出るというのは、ものすごく嬉しいことなんですよ。それを先生がやってくださって、石川忠雄監訳で『現代中国―その実体と分析』という本になったのです。三カ月後の三五年三月には再版が出ましたから、かなり広く読まれたと思います。

山田 僕も読みましたよ。

小田 ああいうことをやってもらえるというのは、大

学院生としてはものすごく嬉しいのです、身の程知らずに喜んでしまうのですよ。でもそれがまたエネルギーになって、研究への取り組みの熱意がまた一段と高まりますから、非常に上手だったと思う。さっきのシユウォルツの本の翻訳だって、自分でやってもいいわけでしょう。それをわざわざ、君、これを参考にしながらいいから、全部原稿を作り直してくれと。当時先生が多忙だったこともあったでしょうが、こちらのモチベーションを高めるといふような意味もあつたのだらうと思ふのです。それから、フレデリック・ノサールの『発信地―北京』の翻訳もそうです。

山田 あれは僕も手伝いました。

小田 あれは私が全部訳して、山田、根岸(毅)両君に読み合わせをお願いしたのです。当時、私はもう大学院生ではなく、助手になっていましたが、とにかく若い人を乗せるのが上手。それと面倒見もとてもよかったです。それは私などが、幸い大学に残してもらえて、講師、助教授、教授といくわけですが、そのプロセスで色々お世話になることがたくさんあり、その肝心なところで必ず石川先生が登場して、よい方向に持っていくてくれる。

たとえば、あるとき「君、アフリカへ行つてないけれど、それはまずいだらう」とおっしゃった。私はあまり外国へ行くのが好きではないので（笑）、当時アフリカへはしばらく行つてなかった。ですから確かにまずいな、それは、と思つていたら、先生は、古い卒業生の方からの、塾への寄付金の一部をもらつてきて、「これで君、行きなさい」と（笑）。

国分 本当ですか。

小田 その代わり、二カ月以上にわたつて一〇カ国以上回れなどと、少々無理な注文をされた（笑）。弟子はたくさんいるのにそういうふうによく目配りをして色々なお膳立てもしていく。

国分 全部自分できちんとされた。

小田 そう、アフリカへ行くのは大変だからって、外務省へ連れていってくれて、当時の中近東アフリカ局参事官に会わせてくれて、こういうわけなので先々ひとつよろしくお願いしますと、そこまでやってくれるのです。

山田 話題が変わって、少し個人的なことも関わるかもしませんが、学生時代の思い出の一つは、先生はノートなしで非常に魅力的な講義をされたことです。私は先

生に、「どうしてあんなにうまく講義ができるのですか」と聞いたことがあります。実はノートがないのではなくて、あの頃図書カードがあつて、先生はそれに要点だけを書いていたのです。

小田 メモはあるんだね。

山田 だけどほとんど見ないのです。これは先生の話の仕方、筋をしゃべる前にちゃんとしておくので、それでよいということでした。授業でもそうだし、先生が塾長とか学部長になられたときの名演説もみな同じやり方だということです。

それから、僕が先生のところに行つた頃は、まだ『中国共産党史研究』が出版された直後でした。資料をじっくり読んで、それで論理をつくり上げていく先生の姿をよく見ていました。それからもう一つは、既存の研究をよく見と調べ、批判的にそれを取り入れていくという論文を書く手法が非常によくわかりました。私などはそれを聴いたり、見ているから、それこそが学問の本道であり、これこそ「研究の実学」であると呼んでいます。そうした学者としての基本的な作法がまだよく見えていた時代がありました。

あと、もう一つ、小此木君が言ったけれど、石川ゼミに入るのは課題が大変でした。

小田 サブノートの作成ね。

山田 私は二月のいちばん寒いときに、小諸の山寺へ閉じこもって、二、三週間ですのノートを作成したことがあります。これは私にとっては、自分がかつて若いときに勉強したという意味での、いい思い出になっています。

小此木 私はよく、「小此木さんはなぜ韓国、朝鮮研究を始めたのですか」という、動機について聞かれるのです。これは日本でも韓国でも聞かれます。そのなかには、なぜあんなに早い時期に始めたのかという問いも含まれているんですけど、実はやはり石川先生の影響だったのです。学部の卒論で朝鮮戦争のことを書いたのですけれど、そのときに北朝鮮に関する勉強をしました。ご承知のように石川ゼミの運営というのは卒論中心でやりますから、自主性がなくともならない。

あるとき私が大学院に行きたいと言ったら、先生が「君、朝鮮の研究をやれ」と言われたのです。僕がそういう関心を持っているのを知っておっしゃって

れたと思うのですが、あとになってみると、先生の方は先ほど話に出ているように、戦略的に地域圏研究のステージを広げていくというようなことを色々と考えられていたのだと思うのです。その当時私はそんなことはわかりませんでしたから、ちょっと戸惑いました。中国研究をやるうと思っていた人間が、隣にシフトしなければいけないわけですから。ですが、先生に言われたということとを非常に重大に受け止めたのです。何となくその研究をやっていけば自分の道が開けていくような(笑)、そんな印象を受けたんです。それが実はきっかけだったのです。けれどもそのとき先生がもう一つおっしゃったのは、おだてるのが上手なんですね、「君、今やればなあ、ほかの人よりも一〇年早いよ、まだ誰もやっていないだから。いいからやりなさい、君は第一人者になれるぞ」とこう言われたもので、それで本当にその気になったようなところがあるんです(笑)。

小田 いや、それは見る目があつたんだ。

小此木 しばらくしてから今度は延世大学と慶應義塾大学の間に姉妹校関係ができて、留学協定を結ぶから、君すぐ行きなさいと言われて韓国に行った。実質的には、

そこからスタートしたわけですよ。

国分 私の場合は、一つはもちろん講義もありますけれど、先生のゼミでの教え方についてです。いま、自身自身が実際になっても確かに忙しすぎると思うのですけれども、当時先生は法学部長をされていた。それで石川先生の個人的な指導という点では、結局ゼミの時間は限られているので、相談したいと電話したら、日曜日に家に来なさいと言う。行ってみたら、もう卒業生がずらりと並んでみんな順番を待っているわけです。結局最後はみんな一緒に会うのですけれども、日曜日の午後、毎週やっていたのではないかと思うぐらいに、色々な卒業生やさまざまな人が御自宅にいられていました。

小此木 授業もやっていたのですね。

国分 もちろん普通の授業もありました。しかし御自宅での印象が鮮烈です。そこで結局、ふだん教室で見られない石川先生ではなくて、紺の着物を着られてパイプを吹かした石川先生に、個人指導みたいなことをしていたわけですから。

もちろんそれは自分から積極的に行かないとダメでしたけれども。私が大学院のちょうど終り頃だと思えます

が、二人の学生が石川ゼミを希望していたのですが、ある学期の関係でその二人がゼミに入れないという状況になったのです。先生は塾長だったのですが、その二人の学生を呼んで、単位にならなくてもいいのだったら、ときどき家にきて勉強しなさいということを書いて、この二人を塾長で忙しい最中に、数か月に一回か二回自宅に呼んで個人指導をし、そして卒論を書かせた。ということとでその二人は陰のゼミ生で、記録にはどこにも残っていないわけですよ。ただ卒業したときに、ゼミ名簿に加えて、今ではゼミの卒業生の一員ですよ。

とにかくゼミは、ほとんどだれも落とさないといいか、希望した学生で自分のところで勉強したいのをどうして落とすのだ、ということはずっと言われていた。ですから意志のある学生に対しては、非常に優しくかったという面がある。大学院などではその指導は本当に厳しかったと思います。ゼミの学生に私たち大学院生がコメントすること自体にコメントしてくるという形で、かなり指導された記憶があります。細かいことですけど、今でもよくそこまで気がつくなあと思うことがありますね。塾長の時代だと思えますが、私がゼミの面倒をみて合宿ま

で行くと、石川先生も合宿にも来られていたのですけれど、あとで塾長室に呼ばれていったら、ご自分の合宿の出張費を私にしてくれるとか、細かい配慮までしていただきましたね。そのへんの細かいところの一人ひとりに対する配慮というのを本当にお持ちだったという感じがしますね。

人材をうまく使うということ

山田 あと、塾長とか学部長としての石川先生を見ると面白いところがありますが、そのあたりはどうでしょう。

小田 学部長時代からもそうですが、塾長になってからの石川先生の最大の長所というのは、人を上手に使ったことだと思います。というと言葉は悪いけれども、適材適所をきちんと見抜いて上手にその人を使っただ。人はみんな限界があるから、自分だけではやれることはたいたしたものではないのです。湘南藤沢キャンパス開設の場合も、ちょっとここは表現が難しいけれども、石川先生はあの二つの学部についてはもしかしたらもつと別のものを想定していたと思うけれど、最後はあのような形

になったでしょう。あれはやはりそういうものを創り上げる能力を持っていると思われ人たちを、上手に使うことができたのですね。

山田 おっしゃるとおりですね。

小田 私も定年後、別の大学の学長をやって、つくづく思うのですが、責任ある立場に立ったときに、いかに人材を上手に見つけてきて、その人材を上手に使うかということが、一番の成功のポイントなのです。わかっているてもそれがなかなかできない。石川先生は実にそこは上手だった、それはもう、一つの才能です。その本人が持っている個々の色々な能力よりも、いま言ったように、そういうことができそうな人間かをきちんと見抜いて、それをどのように使っていくかということの能力のほうが実は大事なのです。なぜなら個人でそんなに何でもできる人はあり得ないのだから。石川先生の学部長時代もそうでしたが、塾長の一六年間に、慶應義塾は非常に発展した、「中興の祖」などと言われたけれども、その点が、たぶんそういう評価を勝ち得た最大の根源とどうか、ポイントだったのではないかと思えます。

山田 先生のやり方を見ていて、小田さんの言われた

ことには本当に私も同感です。藤沢の二学部を先生が全部細かく設計されたわけではないのです。私も小田さんも準備委員会にいたのですが、あそこへ色々な人を呼んで、まずみんなに勝手なことを言わせるんですね。そして先生は、意味があるものは徐々に取り入れていかれるのです。そして最後に、ここは先生の上手なところが、大体学校の先生って自説を展開するから話が膨らむわけです。そこで先生は、「だけど君、それは財政的にできないよ」とかなんとか言って、最終的には自分の考える方向に持っていってしまう。

もう一つ、ここでは松本三郎さんの役割について言っておいたほうがいいと思います。つまり松本さんは石川先生と勝手なことを言うわれわれの委員の間に入って、いろいろな意見を受け止めておられた。

小田 松本さんはあのとき担当理事だったから。

学生運動の時代

山田 そう、担当理事でした。勝手なことを言う教員の意見を受け止めながらも、松本さんも辛かっただろうと思います。そこがあの人への偉いところです。彼がいた

からこそ準備委員会が崩れなかった、大きな理由のひとつだと思っています。

それから、一九七〇年代のはじめというのは、ちょうど学生運動が盛んなときで、いまと違って教授会は教授だけからなっていました。で、われわれは助教授であつたけれど、助教授だつて学生運動が起ると最前線に立たされました。けれども教授会になると何も言うことができないのです。これはけしからんというので、あの金子晃さん、栗林忠勇さん、根岸君などが、私を含めてその頃「四人組」という言葉はありませんでした。教授会解体の主張をしました。そうすると後に石川先生は学部長として根岸君と私だけを呼ぶわけです。「君たちなんだ、ああいうことを言つては困る」というようなことで怒られるわけです。こつちも「はあ」と言つて、そのときはごまかして逃げてきて、また教授会解体ということと言っていました。

小田 譲れないところはあるのだろうけれど、上手に譲るところは譲っていた。

山田 もう一つだけ、先生について重要なことでつけ加えておきたいのは、七〇年代はじめに学生運動があつ

たことです。先生が当時常任理事だということで、学生が先生の研究室に入って消火器なんかを撒いて、本をめちゃくちゃにしてしまったのです。先生が一番がっかりされたのは、みずす書房の『現代史資料』をずっととっておられたのですが、これが全部ダメになってしまったことです。これには先生は本当がっかりしました。ことを言われて、そういう表情をしておられました。

小此木 学生が本に手をつけたというのを、怒っておられましたね。

石川先生の遺産と今後の法学部

国分 それでは最後のところに入りたいと思いますが、石川先生の築かれた遺産を踏まえながら、これから何を法学部に期待するかということをお願いいたします。

小田 法学部への期待というと、もう期待以上の発展ぶりだと思われども……。ただ、今の法学部の原型というのは、大枠でいうと石川学部長時代にできた部分が多いのだから、あとはその上を勢いに乗って走ってきたという感じがします。私などはいまあまり関わりがないので、現状のことをよく知りませんから、とくに期

待の言葉など言わなくても、もうこのままの勢いで行くだろうという気はします。ただ、非常によいことの一つは、悪い意味での純潔主義にもうこだわらなくなっている、そのことは非常によいことだと思います。昔のように先生がたとえば、自分の目の届く範囲にいる人間に声をかけて大学に残すとか、それで成功してきた面もあるけれど、限界もある。しかし近年、そうでは必ずしもない形で、新しい人材のリクルートをするようになってきた。

国分 とくに小田先生や山田先生のおられた時代に、地域研究の関連の人事のときに、とにかく日本でその分野の関連の研究者リストと論文を全部集めて勉強会をやつて、そのなかで誰が一番優秀だったかということを含んで話し合い、そして面識もないので、本人を呼んできて研究会をやるという形で採用に踏み切っていく、こういうプロセスをやったことがありましたね。

小田 それと、慶應義塾に期待ももちろんあるのですけれど、単に慶應義塾だとか、法学部だとかという狭い範囲だけではない思考が大事です。われわれは研究・教育の分野ですからその世界の人たちだけに限ってもいい

のですけれど、慶應義塾で育った人たちが他の大学、研究機関等において、慶應義塾の発展に間接的に貢献しているのだと思います。ですから、塾内の人間だけではなくて、そういった人たちの貢献度というのにも評価しなければいけないし、これからもそういう人たちに期待をしていかなくてはいけないのではないかと思うわけです。その意味で、慶應育ちの研究者で構成される慶應法学会の存在意義は大きいですね。

国分 的確なご指摘をありがとうございます。また、実際塾外から来られた方でも、慶應大好き人間になった先生方も現在もうたくさんいらっしゃるわけですから、これもみんな慶應の力だと言えますね。山田先生、何かございますか。

山田 私はもう現役を離れていますから、具体的にどうするかというのは現役の人に考えてもらい、実行してもらいたいと思います。ただし、この間、六月二八日の慶應法学会と共催した法学研究所の開所式、実は政治学科しか出席していないのですが、あれはよかったと思っています。なぜかという、現役の人たちが、政治学でも法学でもよいのですけれど、いま直面している研

究・教育上の問題を将来に向けて確認しておく必要があると思うのです。今年二〇〇八年は、ちょうど政治学科創立一一〇年の年です。私は一〇〇年目のとき、それが妥当かどうかは別として、学部長として政治学科に五つの課題を提起して去りました。私はこの間の会議に出席して、その五つの課題がどのように実現されているのか、あるいは皆さんがどういう新しい問題を出してくるのかということを見ていたわけです。だからそういう意味では、学部長でも研究所の所長でもいいのですが、法律も政治も一〇年ぐらいの範囲で、いま直面している課題と将来の展望を、過去のもののできるだけすり合わせながら考えていってもらいたいと思ったのです。そういう意味でこの間の土曜日の報告会は面白く聴きました。

国分 あの日は法律のほうも同じようにとても面白い議論でした。

山田 ですから、あの場でしゃべっただけでなく、それを残しておく必要があると思います。『法学研究』にこの間の会議の記録として、そういう項目を設けてもいいのではないですか。

国分 本日は本当にありがとうございました。石川先

生の追悼ということではありましたが、同時に慶應義塾
大学法学部、とくに政治学科や、地域研究を中心とした
研究のあり方というか、それがどういう経緯でつくられ
てきたのか、そして、同時にそれが慶應義塾や日本全体
のなかでどのような意味をもつのか、というような大き
な議論を展開してまいりました。もちろんそこで確認で
きることは石川先生の研究と教育における大きな足跡と
いうことでありますが、しかし、その遺産に甘えること
なく、そうしたものを土台にして、新しい法学部の、今
後の糧にしていきたいというふうに考えております。
ということではお忙しいなか、先生方にお集まり
いただきまして、本当にありがとうございました。

(丁)

(平成二十年七月四日)

石川忠雄先生 略歴

- 一九二二年一月二十一日 東京都に生まれる
- 一九四六年 慶應義塾大学経済学部卒業
- 一九四八年 慶應義塾大学法学部助手兼大学院特別研究生（文部省）
- 一九五五年 慶應義塾大学法学部助教授
- 一九五六年 慶應義塾大学法学部教授
- 一九六〇年 慶應義塾大学法学博士
- 一九六五年―一九九年 アジア政経学会常務理事、理事
- 一九七〇年 慶應義塾常任理事兼慶應義塾大学法学部教授
- 一九七一年―七七年 日本国際問題研究所理事
- 一九七二年 慶應義塾大学法学部長兼大学院法学研究科委員長
- 一九七三年 日本国際政治学会理事
- 一九七五年 日米欧委員会日本委員会委員
- 文部省教育課程審議会委員
- 外務省外交問題懇談会委員

- 一九七七年 慶應義塾長（理事長・大学長）に就任（兼法学部教授）
- 一九七八年 文部省学術審議会委員
- 一九七九年 文部省私立大学審議会委員
- 一九八〇年 文部省大学設置審議会委員、常務委員
日中人文社会科学交流協会理事
International Association of Universities 理事
- 一九八一年 文部省社会教育審議会副会長
慶應義塾長に再選
- 一九八二年 文部省大学設置審議会会長
大学基準協会会長
- 一九八三年 日本私立大学連盟会長
- 一九八四年 日中友好二十一世紀委員会日本側座長
日本私立大学団体連合会会長
- 一九八五年 慶應義塾長に三選
- 一九八六年 文部省大学改革協議会座長
- 一九八七年 慶應義塾大学名誉教授、文部省大学審議会会長
- 一九八八年 東京都教育委員会委員長、全国都道府県教育委員会連合会会長
- 一九八九年 慶應義塾長に四選
- 一九九一年 文化功労者
- 一九九三年 慶應義塾長退任、慶應義塾学事顧問

一九九四年

慶應義塾評議員

一九九五年

勳一等旭日大綬章受章

二〇〇〇年

文化勲章受章

二〇〇七年九月二十五日

逝去（享年八十五歳）

石川忠雄先生 主要著作目録

〈著書・編書〉

- | | | |
|-------------------------|-----------|-------|
| 『中国憲法史』 | 慶應通信 | 一九五二年 |
| 『中国共産党史研究』 | 慶應通信 | 一九五九年 |
| 『中国政治史講義案』 | 慶應通信 | 一九六三年 |
| 『中華人民共和国―その実態と分析―』 | 時事通信社 | 一九六四年 |
| 『現代中国の諸問題』 | 慶應通信 | 一九六七年 |
| 『国際政治と中共』 | 有信堂 | 一九六八年 |
| 『戦後資料 日中関係』(中嶋嶺雄、池井優共編) | 日本評論社 | 一九七〇年 |
| 『日中間題私見』 | 酒井書店 | 一九七三年 |
| 『私のみた日本外交』 | 慶應通信 | 一九七六年 |
| 『転換期の東南アジア』(朴在圭共編) | 成甲書房 | 一九七七年 |
| 『私の夢 私の軌跡』 | 慶應通信 | 一九九三年 |
| 『未来を創るころ』 | 慶應義塾大学出版会 | 一九九八年 |
| 『禍福こもこもの人生』 | 慶應義塾大学出版会 | 二〇〇四年 |

説書

- 『ソヴェエトのアジア政策』（マックス・ペロフ著 小谷秀二郎共訳） 日本外政学会 一九五七年
- 『現代中国―その実体と分析―』（ハワード・L・ポアーマン著 監訳） 日本外政学会 一九六〇年
- 『湖北秋収暴動経過の報告』（三上諦聴・芝田稔共訳） 関西大学東西学術研究所 一九六一年
- 『第四次全国労働代表大会に提出せる上海総工会の報告書』（三上諦聴・芝田稔共訳） 関西大学東西学術研究所 一九六二年
- 『一九二二年より一九二六年にいたる中国共産党五年來の政治主張』（三上諦聴・芝田稔共訳） 関西大学東西学術研究所 一九六三年
- 『中国共産党史―中国共産主義と毛沢東の抬頭―』（ベンジャミン・I・シュウォルツ著 小田英郎共訳） 慶應通信 一九六四年
- 『発信地―北京』（フレデリック・ノサール著 小田英郎共訳） 時事通信社 一九六四年
- 『抗日軍政大学の動態―中国共産党史研究の一資料』（三上諦聴・芝田稔共訳） 関西大学東西学術研究所 一九六五年
- 『毛沢東』（スチュアート・シユラム著 平松茂雄共訳） 紀伊國屋書店 一九六七年
- 『中共革命への道（ガイ・ウイント著）』 時事通信社 一九六七年
- 『中国―毛沢東以後への過渡期―』（A・ドーク・バーネット著 山田辰雄共訳） 鹿島出版会 一九七六年

単行書収録論文

- 「中華人民共和国憲法の内容とその特質」
日本外政学会編『外政講座シリーズ 中共』
日本外政学会 一九五六年
- 「西安事件の一考察―モスコ―と中国共産党との関係について―」
慶應義塾大学法学部編『慶應義塾創立百年記念論文集 法学部第二部』 慶應義塾大学法学部 一九五八年
- 「中国共産党のリーダーシップの若干問題」日本外政学会編『中共政権の現状分析』 日本外政学会 一九六一年
- 「中華人民共和国の対日政策に関する一考察―一九四九年―一九五八年を中心として―」
英修道博士還暦記念論文集『外交史及び国際政治の諸問題』 慶應通信 一九六二年
- 「中国現代史」
アジア政経学会編『中国政治経済綜覧』 日刊労働通信社 一九六二年
- 「中国共産党の組織と実態」
アジア政経学会編『中国政治経済綜覧』 日刊労働通信社 一九六二年
- 「中共の国内革命の成功」
国民講座日本の安全保障編集委員会編『極東の安全保障』 原書房 一九六八年
- 「抗日民族統一戦線の形式と西安事件」
筑摩書房編集部編『世界の歴史』第一六巻 筑摩書房 一九六九年
- 「日中関係の展望」
日本文化フォーラム編『中国問題と日本の選択』 自由社 一九七一年
- 「日中関係の展望と三極構造」

K・メーネルト他著『巨大なる三角形 ワシントン―北京―モスクワ』

慶應通信 一九七二年

「中国共産党史に見る党内権力闘争」

桑原寿二編『中国の実像』

永田書房 一九七三年

「日中関係概観」

鹿島平和研究所編『世界のなかの日本』

鹿島出版会 一九七五年

〈雑誌掲載論文〉

「中国憲法の基本的諸問題に関する一考察——一九三三年以降の制憲論争を中心として」(一、二完)

法学研究二二卷四、五号 一九四八年

「新民主主義革命と中共の和平八条件」(一)〜(三)

三色旗一五〜一七号 一九四九年

「清末及び民国初年に於ける連邦論と省制論」

法学研究二四卷九・一〇号 一九五一年

「民国政治史論」(一、二完)

三田政治学会誌三三、三四号 一九五一年

「中華人民共和国三年のうごき」(一、二、三完)

三色旗五九、六〇、六一号 一九五三年

「李立三コース問題の一考察」(一、二完)

法学研究二六卷七、九号 一九五三年

「大革命敗退直後における中国共産党について」

法学研究二七卷八号 一九五四年

「武漢政府時代の中国共産党」

アジア研究一卷三号 一九五五年

「中華人民共和国憲法について」(一)(二)

三色旗八四・八五号 一九五五年

「第一次国共合作とコミンテルン」

法学研究二八卷一一号 一九五五年

「新中国に於ける人民民主統一戦線とその将来」

アジア評論三五号 一九五五年

「上海国是会議二種憲法草案」	国際政経事情二〇号	一九五六年
「李立三コースとロシア留学生派」	法学研究二九卷五号	一九五六年
「ハーヴァード大学に於ける中国研究」	外政四号	一九五七年
「コロンビア大学の中国研究」	外政六号	一九五七年
「アメリカの中国研究」	アジア研究四卷四号	一九五八年
「江西ソヴィエト期における抗日反帝統一戦線の諸問題」	法学研究三一巻七号	一九五八年
「ワシントン大学の中国研究」	外政八号	一九五八年
「社会主義国における中国の役割—その自主性をめぐって—」	中央公論七三巻一—号	一九五八年
「京漢鉄道罷業と陳独秀」	法学研究三一巻一—号	一九五八年
「中共とソ連—中共の対ソ主体性—」	史泉一四号	一九五九年
「福建人民革命政府事件と中国共産党」	法学研究三三巻二—号	一九六〇年
「劉少奇をめぐる若干の問題」	共産圏問題四巻一—号	一九六〇年
「中共の対日政策の分析—対日政策の基本目標と具体的政策の展開過程—」	日本及日本人一一巻四号	一九六〇年
「最近の中ソ対立論について」	三色旗一五二—号	一九六〇年
「抗日民族統一戦線形成過程における中国共産党とコミンテルン」	法学研究三四巻二—号	一九六一年
「中共の対外政策—対日政策を中心として—」	アジア経済二巻三号	一九六一年
「中共の指導者と外国教育」	三色旗一五七号	一九六一年
「中国共産党指導部に関する一考察—八期中央委員を中心として—」	法学研究三四巻七号	一九六一年
「東南アジアにおける中ソの活動状況」	共産圏問題六巻二—号	一九六二年

- | | | |
|---|------------|-------|
| 「東南アジアと中ソ関係」 | 中央経済一 一卷四号 | 一九六二年 |
| 「アメリカの中国研究」 | アジア研究四卷四号 | 一九六二年 |
| 「東南アジアにおける中・ソの活動」 | 三田評論六〇四号 | 一九六二年 |
| 「内政と中共指導部の動向」 | 自由四卷七号 | 一九六二年 |
| 「中ソ関係の展望」 | 共産圏問題七卷五号 | 一九六三年 |
| 「アメリカの中共政策―ヒルズマン演説を中心として―」 | 三田評論六二五号 | 一九六四年 |
| 「中共の指導者群と派閥」 | 季刊社会科学一号 | 一九六四年 |
| 「中共の対日政策」 | 三色旗一九四号 | 一九六四年 |
| 「中華民国訓政時期約法の制定と蒋介石」 | 法学研究三七卷七号 | 一九六四年 |
| 「中国における国内情勢と外交政策―一九五七年以降を中心として―」 | 法学研究三七卷二二号 | 一九六四年 |
| 「中・ソ対立―中共を支えるもの―」 | 日本八卷二号 | 一九六五年 |
| 「中共の現実をどうみるか―その内政と外交―」 | 自由七卷三号 | 一九六五年 |
| 「中華人民共和国の外交政策決定に関する試論的考察」 | 法学研究三八卷一一号 | 一九六五年 |
| 「中共の内政・外交の回顧と展望」(平松茂雄共著) | 国際問題七〇号 | 一九六六年 |
| 「中国実力者列伝―毛沢東とその後継者たち―」(監修) | 中央公論八一巻一号 | 一九六六年 |
| 「中国外交政策の決定要因」 | 中央公論八一巻四号 | 一九六六年 |
| 「中共外交政策の性格―一九五七―八年を中心として―」(平松茂雄共著) | 季刊社会科学九号 | 一九六六年 |
| 「中国共産党の大衆動員方式」 | 中央公論八一巻一号 | 一九六六年 |
| 「中共の『文化大革命』の見方」 | 三色旗二二五号 | 一九六六年 |
| 「中共外交政策形成過程の一考察―一九五七年―五八年を中心として―」(平松茂雄共著) | | |

- | | | |
|----------------------------------|----------------|-------|
| 「文化革命の現状をどうみるか」 | 法学研究四〇巻一号 | 一九六七年 |
| 「米中関係の展望」 | 国際時評四〇号 | 一九六八年 |
| 「中ソ関係の現状と見通し」 | アジア・クオータリー一巻一号 | 一九六九年 |
| 「中共の文化革命の現状とその長期的展望」 | アジア・クオータリー一卷二号 | 一九六九年 |
| 「中共外交政策の展望」 | 国際時評四八号 | 一九六九年 |
| 「朝鮮半島をめぐる国際情勢」 | 国際時評五一号 | 一九六九年 |
| 「中共外交政策形成過程の研究——一九五三—四年を中心として——」 | アジア・クオータリー一卷三号 | 一九六九年 |
| | 法学研究四三巻一号 | 一九七〇年 |
| 「朝鮮戦争と中国人民解放軍の近代文化について」 | 法学研究四三巻七号 | 一九七〇年 |
| 「ソヴェエト革命時期における紅軍の基本的性格に関する一考察」 | 法学研究四四巻三号 | 一九七一年 |
| 「日本の国益と中国問題」 | 時の課題一五巻五号 | 一九七一年 |
| 「中国外交政策の新展開」 | 国際時評七五号 | 一九七一年 |
| 「日中復交と日本の国益」 | 自由一四三号 | 一九七一年 |
| 「ニクソン大統領の訪中と台湾」 | 国際時評七八号 | 一九七一年 |
| 「単細胞では外交はできない」 | 諸君四巻六号 | 一九七二年 |
| 「北京以後の日本外交」 | 経済往来二四巻一号 | 一九七二年 |
| 「新内閣と中国問題」 | 国際時評九一号 | 一九七二年 |
| 「日中国交回復と台湾の地位」 | アジア七巻一〇号 | 一九七二年 |

- | | | |
|---|-------------------|-------|
| 「日中共同声明の読み方」 | 諸君四卷一二号 | 一九七二年 |
| 「『中国の本』をどう読むか」(平松茂雄共著) | 諸君五卷一号 | 一九七三年 |
| 「三極世界における日米安保の役割」 | 革新三〇号 | 一九七三年 |
| 「日中復交と今後の外交姿勢」 | 月刊時事一八卷二号 | 一九七三年 |
| 「中国の動向と日中関係の将来——緊張緩和の動向に関連して——」(平松茂雄共著) | 防衛論集一一卷三・四号 | 一九七三年 |
| 「日中復交と日本外交」 | 月刊時事一八卷七号 | 一九七三年 |
| 「多極化時代に於る日本の進路」 | アジア八卷二二号 | 一九七三年 |
| 「中国の外交姿勢」 | 国際時評一〇五号 | 一九七四年 |
| 「日本のアジア政策」 | アジア・クォーターリー六卷一・二号 | 一九七四年 |
| 「一九四〇年代の国共関係」 | 三田評論七三四号 | 一九七四年 |
| 「国際政治の認識と外交防衛政策」 | 革新四三号 | 一九七四年 |
| 「中国外交はこれでいいか」 | 自由一六卷六号 | 一九七四年 |
| 「蒋介石没後の中国問題」 | 国際時評一二三号 | 一九七五年 |
| 「変動化するアジアと日本の対応」 | 論展二卷四号 | 一九七五年 |
| 「激動する国際政治情勢下の日本の選択」 | 経営者九号 | 一九七六年 |
| 「毛沢東以後の中国」 | 三田評論一月月号 | 一九七六年 |
| 「毛沢東死後の中国——毛主席の遺功とその内包する宿命——」 | 自由民主二四九号 | 一九七六年 |
| 「一九八〇年代の中国と日本——アジアでの勢力均衡のための必要条件——」 | アジア公論六卷五号 | 一九七七年 |
| 「新段階の中国・アジア・日本」 | アジア一二卷九号 | 一九七七年 |

「大躍進運動をめぐる党内論争」(国分良成共著)

法学研究五二卷七号 一九七九年

〈欧文論文〉

- Communist China's Policy toward Japan, E. F. Szczepanik, ed., *Symposium on Economic and Social Problems of the Far East* (Hong Kong University Press, Hong Kong), 1962.
- The Role of China in the Socialist Camp, *Journal of Social and Political Ideas in Japan*, Vol. 1, No. 1, 1963.
- How to Look upon the Reality of Communist China — Its Domestic Situation and Foreign Policy, *Review* (Tokyo), No. 4, 1965.
- Communist China's Policy toward Japan, *Journal of Social and Political Ideas in Japan*, Vol. 4, No. 4, 1966.
- Japan, China und das Dreieck, *Das große Dreieck Washington-Moskau-Peking*, Mit Beitr. v. Schwellen, Joachim, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1971. (邦訳'前掲『巨大な△(三角形)』)
- Outlook on Sino-Japanese Relation, *Japan in World Politics*, Institute for Asian Studies, 1972.
- The Normalization of Sino-Japanese Relations, Priscilla Clapp and Morton H. Halperin, eds., *United States-Japanese Relations: the 1970s* (Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts), 1974.
- A Review of Japanese-Chinese Relations, Kajima Institute of International Peace, ed., *Japan in the World* (The Japan Times Ltd), 1976.

〈資料・その他〉

- 「上海国是会議乙種憲法草案解題」
 法学研究二三卷七号 一九五〇年
- 「中華人民共和国婚姻法」(須藤次郎共著)
 法学研究二三卷一〇号 一九五〇年
- 「解説 中華人民共和国における政党及び団体」
 法学研究二四卷一〇号 一九五一年
- 「中華人民共和国全国人民代表大会及び地方各級人民代表大会選挙法」(及川恒忠共著)
 法学研究二六卷四号 一九五三年
- 「新中国選挙法に関する資料」
 法学研究二七卷五号 一九五四年
- 「中華人民共和国憲法及び四組織法」(及川恒忠共著)
 法学研究二八卷三〇号 一九五五年
- 「戦後日本における現代中国関係主要雑誌論文目録」(一～六完)
 法学研究二九卷六号 一九五六年
- 「ロバート・C・ノース氏による張国燾回顧談記録」
 法学研究三〇卷一〇号 一九五七年
- 「オーエン・ラティモア教授著作目録」
 法学研究三一卷五号 一九五八年
- 「最近日本における現代中国関係主要雑誌論文目録」(一、二完)
 法学研究三一卷一、二二号 一九五八年
- 「International Press Correspondenceにおける中国関係記事目録」
 法学研究三二卷一〇号 一九五九年
- 「International Press Correspondenceにおける中国関係記事目録」
 法学研究三二卷一〇号 一九五九年
- 「一九二七年八月～一九三〇年六月」(徳田教之共著)
 法学研究三三卷五号 一九六〇年
- 「中山艦事件『党務整理案』問題に関する中国共産党関係資料」
 法学研究三三卷一〇号 一九六〇年
- 「『陳誠文庫』目録―台湾における中国共産党史資料―」
 法学研究三五卷七号 一九六二年
- 「『八・一南昌暴動』に関する四文書」
 法学研究三六卷一〇号 一九六三年